●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 44

44th Letter

法　持　寺　伝　説

伝説そぞろ歩き

牧水が
うつろう空蝉
吟ずるを
女神見守る
歌会おかし

空海手彫りの地蔵菩薩が本尊
若山牧水歌碑も宮中正門内に残る

熱田神宮西門から西へ約800m行ったところに、白鳥山法持寺があります。今は曹洞宗の寺ですが、もともとは空海(弘法大師)が熱田を訪れた時、熱田神宮に百日参籠をして行法を修めました。その際に空海自らが地蔵菩薩の像を刻んでこの寺の本尊としたという言い伝えがあります。したがって、曹洞宗が日本に開創される以前から熱田にあった古刹ということができます。

なお、空海は真言宗の開祖で、日本天台宗の開祖・最澄とともに、日本仏教の大勢が、奈良仏教から平安仏教に転換していく大きな流れを築いた人物です。

寺伝によると天長年間(824～834年)の創建で、文明年間(1469～1487年)に明谷義光和尚によって再建されたとされています。古くは「宝持寺」と号しましたが、承応年間(1652～1654年)に今の寺号に改められました。

また、明治時代の歌人・若山牧水もこの地を訪れたことがあります。西行を慕い、西行同様、旅を好んだ牧水は、明治末から大正にかけて、旅の途中で何度も熱田を訪れて、法持寺の月笑軒において歌会を開いていました。これは当時熱田から出ていた歌誌『八少女』の会員に迎えられての歌会でした。牧水死後の昭和11年(1936年)11月22日には次のような歌碑が建てられました。

「うす紅に　葉はいちはやく　萌えいでて
咲かんとすなり　山さくら花」

しかし、月笑軒があった場所に宮中学校が建設されることとなり、月笑軒は移設、歌碑は宮中学校の正門玄関を入ってすぐの場所に移設され、往時を物語っています。

また、境内のすぐ西側の白鳥御陵(白鳥古墳)は、古くは法持寺の守護神であり法持寺の管理下にありましたが、明治の初めに熱田神宮に移され、今は名古屋市の管理下にあります。

▲宮中学校の校庭には牧水の歌碑が建っている。

9人のミューズたちが各分野を担当
ミュージック、ミュージアムの語源

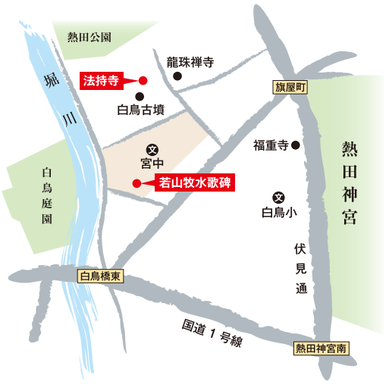
法持寺は歌人にも愛され文化芸術が育まれる場所でもあったという話でしたが、ギリシャ神話で文化や芸術の神々といえば、ミューズの女神です。彼女たちは、さまざまなジャンルを司る9人の女神たちで、ゼウスと記憶の女神・ムネモシュネの娘たちです。

それぞれの女神が担当するジャンルは、カリオペが叙事詩、クレイオが歴史、メルポメネが悲劇、エウテルペが叙情詩、エラトが恋愛詩、テルプシコラが舞踏、ポリュヒュムニアが音楽・幾何学、ウラニアが天文・占星、タイレアが喜劇というようになっていました。歌会はさしずめ、カリオペ、エウテルペ、エラトの担当分野となるところでしょうか。牧水が月笑軒において開いた歌会は、女神たちが見守っていたのかもしれません。ミューズの女神たちは、太陽と音楽と医術の神であるアポロンと結びつけて考えられていて、アポロンとマルシュアスの演奏の審判をしたこともあります。また、彼女たち自身も音楽についてとても誇りを持っていたので、タミュリスやセイレンたちが競争を挑んだ時は厳しい結末が待っていました。

このミューズが語源となっている言葉が、ミュージック(音楽)です。古代ギリシャでは、詩や劇などの朗誦形式の芸術はいつも美しい調べにのせて行われていたことを考えると、この調べが芸術を司るミューズたちの名から、「ミュージック」と名づけられたのも、納得です。

また、ミューズたちの神殿は、ムーセイオンと呼ばれ、学問、教育、研究の殿堂ともいうべき場所ですが、これがミュージアムの語源で、現在では、美術や歴史、科学などのコレクションを陳列する美術館、博物館などの意味で使われています。

▲歌人・若山牧水も何度も訪れ、歌会を開いていた法持寺。



※次回は、熱田の渡しに伝わるシーボルト伝説を特集します。お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K　■ イラスト／Rei　■ 取材・文／Icarus